

- 石塚茂清（現代語・現代文化学系）『ニーベルンゲンの歌』：言葉と舞台．朝日出版社，1998 [941-I84]
- 池上良正（哲学・思想学系）民間巫者信仰の研究：宗教学の視点から．未来社，1999 [163. 9-I33]
- 磯田正美（教育学系）生徒の考えを活かす問題解決授業の創造：意味と手続きによる問いの発生と納得への解明．明治図書出版，1999（シリーズ・魅力ある数学授業を創る 7） [375. 41-I85]
- 伊藤益（哲学・思想学系）日本人の愛：悲憫の思想．北樹出版，1996 [158-I89]
- 日本人の知：日本的知の特性．北樹出版，1995 [121. 3-I89]
- 日本人の死：日本的死生感への視角．北樹出版，1999 [114. 2-I89]
- 大田友一（電子・情報工学系）Mixed reality：merging real and virtual worlds. Ohmusha, 1999 [548-029]
- 大塚藤男（臨床医学系）Phacomatosis in Japan：epidemiology, clinical picture, and molecular biology. Japan Scientific Societies Press, 1999 (Gann monograph on cancer

- research no.46) [494.5-J24]
- 河上正秀（哲学・思想学系）ドイツにおけるキルケゴール思想の受容：20世紀初頭の批判哲学と実存哲学．創文社，1999 [139-Ki14]
- 榎原隆（教育学系）言語生活者を育てる：言語生活論&ホール・ランゲージの地平．東洋館出版社，1996（シリーズ・国語教育新時代） [375. 8-Ku95]
- 言語活動主義・言語生活主義の探究：西尾実国語教育論の展開と発展．東洋館出版社，1998 [375. 8-Ku95]
- 斎藤功・松本栄次（地球科学系）ノルデステ：ブラジル北東部の風土と土地利用＝Nordeste. 大明堂，1999 [296. 2-Sa25]
- 正野俊夫（農林学系）応用昆虫学入門．川島書店，1995 [486. 1-Ma81]
- 中谷陽二（社会医学系）精神鑑定の事件史：犯罪は何を語るか．中央公論社，1997（中公新書 1389） [498.99-N43]
- 宮永豊（体育科学系）アスレチックトレーナーのためのスポーツ医学. 文光堂, 1998 [780.19-Mi79]
- 山川隆一（社会科学系）国際労働関係の法理. 信山社, 1999 [366.12-Y27]

私の一冊

石塚茂清

「ニーベルンゲンの歌...言葉と舞台...」

石塚茂清著（朝日出版社 1998）

〔中央図：948-I84〕



『ニーベルンゲンの歌』は、ドイツの『イーリアス』と言われ、ゲーテの『ファウスト』と並ぶドイツ文学の最高傑作と呼ばれている。

本書では、叙事詩に用いられている言語の修辭的語法の解明を試み、武器や古楽器について考察し、更に叙事詩ゆかりの地の写真を添えている。

叙事詩の作者は未詳、叙事詩成立は西暦1200年頃である。この叙事詩は、不死身の英雄ジークフリートと、美貌の女王プリュンヒルトの伝説を素材とし、5世紀前後のゲルマン民族移動期の史実を取り込んでいる。爽やかな魂、良心の厳しさ、

苦悩の切実さなどが見事に描かれている。ここに登場する人物たちの言動は、現代の我々に生き生きと迫り、訴えかける何かをもっている。

13世紀初頭に中高ドイツ語で書かれた原典は、当時の読者に古雅な響きを感じさせるように意図して書かれている。そのような語彙語法が、原典読解を困難にしている。そこで、本書では読み解く上で肝要な語彙語法に関する事項、即ち「直喩、隠喩、登場人物の換称、人称交替、代名詞先置」を扱い、また文化史的な側面として「権力支配の象徴としての投槍、騎士でもある楽人、古楽器、ジークフリートの飲んだ酒」などを取り上げている。地理的には、西はアイスランドから東はハンガリーに至る広大な地域を舞台にしている、古代に栄えた町の名前も出てくる。本書では、そのような地名関連の詩節にも力点を置いている。私はこれまで、叙事詩に描かれている地に何度か足を運び、その風土に身を置き、叙事詩の舞台の雰囲気を実感し、古代の人々の心に想いを馳せてきたが、その一端を第11章、第12章にまとめている。

翻訳ないしは原典でこの叙事詩を読む方々に、本書が読解の一助となるよう願っている。
(いしづか・しげきよ 現代語・現代文化学系 教授)

中谷陽二

「精神鑑定の事件史 犯罪は何を語るか」

(中公新書 1389)

中谷陽二著 (中央公論社)

[中央図, 医学図 498.99-N43]



異常な犯罪が発生するたびに精神鑑定が話題になる。本書は犯罪史上で知られたいくつかの事件を取り上げて精神鑑定の舞台裏をのぞいたもので

ある。登場するのは、レーガン大統領の暗殺未遂犯ヒンクリー青年、ピリー・ミリガンを筆頭とする「多重人格」の犯罪者たち、ロシア皇太子に向かって白刃を振るった大津事件の犯人津田三蔵、今世紀初めに南ドイツで起きた大量殺人事件の犯人ワグナー、その日本版とも言える、小説や映画のモデルになった津山事件の犯人都井睦雄、晩年に妻を絞殺したカリスマ的哲学者のレイ・アルチュセール、終戦直後の俳優仁左衛門殺しの犯人などである。

社会に衝撃を与えたこれらの事件の裁判では、精神鑑定のあり方を通じて精神医学の真実性が俎上に乗せられる結果になった。ヒンクリーに対する無罪評決は精神異常を理由とする免責制度への集中砲火を呼び、連続殺人犯ピアンキの裁判では多重人格の有無をめぐる鑑定人らが二派に別れて争った。アルチュセールに対する精神鑑定と予審免訴の手続きは、後にアルチュセールみずからによって辛辣に批判された。

精神鑑定にはさまざまな技術的困難があるが、それらがクリアされたとしても、なお陥穽が潜んでいる。詰まるところ、鑑定が診断する人とされる人の出会いであり、両者のこころのもつれ合いが演じられるからである。しかもそれは裁判というすぐれて演劇的な空間においてである。映画「タクシー・ドライバー」の熱狂的ファンで、ジョディ・フォスターのストーカーでもあったヒンクリーは、狂気とも正常ともつかないメッセージを放って鑑定人を混乱に陥れ、ミリガンは「虐待のトラウマに苦しむ多重人格患者」になりきって精神科医と心理学者の関心を見事にとらえた。かたやワグナーを「典型的パラノイアの症例」として報告することで学問的野心を満たしたガウプ教授と、かたや文学的成功に執着し続けたワグナーの間には、感情の深部で引き合うものがあった。

精神鑑定はなぜ誤りやすいか。それは人間のこころが厄介なものだからである。(本書は平成十年 度講談社出版文化賞〔科学出版賞〕を受賞した。)

(なかたに・ようじ 社会医学系 教授)